

はじめに

本日は 19 章 16 節から 20 章 3 節までを学びます。この記事では、ダビデ王とその家臣団が、マハナインを出た後、南下してヨルダン川を渡り、ギルガルに来て、そこからついにエルサレムに上り、王宮に戻った、ということが言われています。

この一連の行軍の中で、聖書は二つのことを語っています。一つはダビデが、ヨルダン川の河畔で、彼に逆らったシムイとヨナタンの遺児メフィボシェトに対して裁定し、またマハナインでダビデ軍を支えたバルジライに対して感謝と別れを告げたことが語られています。

もう一つは、ギルガルへ進む途中、イスラエル諸部族とユダ族との間に確執が表面化したこと語られています。この確執は、ビクリの子シェバによって利用されます。彼は、イスラエル諸部族に対してダビデに従わないようにといい、結局、ユダ族だけがダビデ王に従ってエルサレムに戻るのです。その後、このシェバによる反乱がおこりますが、それは、次回学ぶことにします。

いずれにせよ、ダビデとその一行の帰還は主の御心の実現ということが出来ます。かつてダビデはシムイに呪いを浴びせかけられた時、次のよう言っていました。「主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださるかもしれない。」サムエル記下 16 章 12 節の御言葉です。ダビデは神の与える苦しみを甘受したのです。それはまた神に希望を置くことでもありました。この御言葉のとおり、今や、主なる神は、ダビデの苦しみを顧みて、エルサレムへ導き返してくださるのです。この神の御心が、わたしたちの学ぶ箇所全体を貫いています。

I サムエル記下 19 章 16 節～20 章 3 節の話の流れ。

そこでサムエル記下 19 章 16 節から 20 章 3 節までの話の流れを見てみましょう。すでに触れたようにここは大きく二つの部分から成っています。19 章 16～40 節と 19 章 41 節～20 章 3 節までです。

まず 19 章 16 節～40 節までです。16 節をみると、ダビデ王たち一行は、ヨルダン川を渡ろうとしていました。ユダの人々は、ギルガルまで出迎えに来ており、ダビデ一行の渡河を助けようとした。

17 節には、そうした者たちの中に、ベニヤミン族のゲラの子シムイも来ていたと語っています。シムイはかつてダビデ王たちが都落ちする際に、執拗に呪いの言葉を浴びせかけた者でした。それと対照的に 18 節ではサウル家の従者であったシェバについて語られます。彼は、ダビデ王に忠誠を誓った者です。彼とその一族は、ヨルダン川を渡ってダビデ王の前にきました。そしてダビデ王の一行が川を渡る際、助けるつもりであることを示したわけです。

19 節後半から 21 節までは、シムイがダビデに対して赦しを懇願している記事です。それに対して 22 節ではダビデの姉ツェルヤの息子アビシャイが、死刑にすべきであると進言しています。しかしダビデは、23 節～24 節でシムイに対して赦しを語り、また死刑にしないことを誓うのです。

25～31 節は、友人ヨナタンの遺児メフィボシェトに対するダビデの対応です。メフィボシェトもダビデ王を出迎えに来ていたわけです。ダビデは、彼に対しても赦しを与え、旧サウル王家の忠臣であったツィバと地所を分け合うようにというのです。以上がダビデ王を出迎えに来た者たちです。

続く 32～40 節は、見送りに来たバルジライとの別れです。彼はダビデ王の一行がマハナインに滞在中、生活を支えた者です。80 歳という高齢になりましたが、ダビデを見送りにやって来たわけです。ダビデはバルジライの忠義に感謝し、老後の面倒を見るというのですが、バルジライはダビデ王の足手まといになってはいけないといい辞退します。そしてキムハムという息子をダビデの僕とします。

さて次に、後半の 19 章 41 節から 20 章 3 節です。ダビデ王たちはヨルダン川を渡り終わりました。そして 41 節にあるように、ギルガルへと進みます。ユダの全兵士とイスラエルの兵士の半分の共に進みました。しかしその途中、イスラエルの兵たちとユダの兵たちの間に確執が起こります。この争いの原因は、もともとイスラエル諸部族とユダ族が共にダビデを王としたのではなく、別々にダビデを王としたことあります。ここでは、いわば王の取り合いをしています。

20 章 1 節～2 節では、この争いに付け込んで、ベニヤミン人ビクリの息子シェバとう名のならず者が、角笛を吹き、反ダビデ、反ユダ族の運動をしました。その結果、何と、イスラエル諸部族はダビデを離れてしまうのです。ここから後に、シェバの反乱が引き起こされます。

しかし当面は、ダビデ王とその一行はユダ族と共にエルサレムに上り、王宮に戻る事ができたわけです。ダビデは、王宮を守らせた十名の側女たちの処遇を決めます。彼女たちの面倒を生涯見ることにします。しかしダビデは彼女たちのところに入ることはなかったのです。彼女たちはアブサロムによって奪われた者たちだからです（Ⅱサム 16:22 参照）。そこにあるのは所有の観念であって、性的道徳における汚れではありません。尚、彼女たちを監視付きの家に入れたのは、残酷なことのようには思いますが、もちろんシェバの反乱に対して備えてのことです。彼女たちの中からビクリの反ダビデ～反ユダの動きに呼応するようなことが起こっては困るからです。

以上の話の流れを箇条書きにすると、以下のようになります。

19 章 16～40 節 ダビデ、ヨルダン川を渡る。

(1) ダビデを出迎える者たち 19 章 16～31 節

①ダビデを出迎える者たち、19 章 16～19 節前半

ユダの人々、シムイ、ツィバ、メフボシェト

②シムイに対する赦し 19 章 19 節後半～24 節

③メフボシェトに対する赦し 19 章 25～31 節

(2) ダビデを見送る者、忠実な僕バルジライとの別れ 19 章 32～40 節

19 章 41 節～20 章 2 節前半

(1) イスラエルとユダの確執 19 章 41～44 節

(2) ビクリの子シェバの反乱の始まり、20 章 1～2 節前半

20 章 2 節後半～3 節 ダビデ、王宮に戻る。十名の側女たちの処遇について。

Ⅱ. サムエル記下 19 章 16 節～20 章 3 節の解説

【16 節】

「王は帰途につき」とあります。これはサムエル記下 15 章 16 節でダビデが都落ちする際、「王は出発し」とありますが、それに対応したものです。アブサロムの反乱は終了したので、ダビデ王はマハナイムの町からエルサレムに向かって帰るのです。マハナイムはヤボク川の北岸の町です。おそらくダビデとその一行はヤボク川を越えて、ヨルダン川沿いに南下して行ったと思われます。

他方、ユダの人々は、ダビデ王の一行を出迎えにヨルダン川の対岸のギルガルに来ていました。そこはかつてヨシュアが陣を敷き（ヨシュア 5:10～15）、サウルが王に即位した町でした（Ⅰサム 11:14）。ユダの人々は、ダビデには家族も同行していましたから、「ヨルダン川を渡るのを助けようとして」いたわけです。

【17 節】

こうした王の帰還を出迎える者たちの中に、「バフリム出身のあのベニヤミン人、ゲラの子シムイ」もいました。すでに触れたように、彼はダビデの一行が「都落ち」する際に、執拗に呪いの言葉を浴びせ続けた者です。彼も、ダビデを出迎え恭順の意志を示そうとして、バフリムから「急いで下って来た」わけです。また「サウル家の従者であったツィバ」も来てきました。彼はダビデ王に忠誠を誓った者です。彼は「十五人の息子と二十人の召し使い率い」ていました。これは一族郎党こぞってダビデを出迎えたということでしょう（Ⅱサム 9:10）。彼らは、早速「ヨルダン川を渡って、王の前に出た。彼が渡し場を渡ったのは、王の目にかなうよう、渡るときに王家の人々を助けて川を渡らせるためであった」のです。ツィバの忠臣ぶりが分かる記事です。

さてそのようにダビデの一行を助ける働きが行われる一方、シムイはダビデの前にひれ伏し赦しを嘆願しています。かつてダビデとその一行を呪ったという悪を、どうか忘れ、罪を赦してくださいとお願いしました。何とも虫のいいことですが、わたしたちが神に対して罪の赦しを願うとき、思いのほかシムイの姿に似てくるのではないのでしょうか。するとアビシャイは、早速、シムイを死刑にすべきだとダビデに進言しています。理由は「主が油注がれた方をののしった」ためです。

しかしダビデは、まず「ツェルヤの息子たちよ」と呼び掛けました。ツェルヤはダビデの姉です。彼女の息子であるアビシャイとその兄ヨアブに対しても呼びかけたわけです。ダビデは、まさしく主が油注がれたイスラエルの王であるからこそ、裁きは神がなさるもの、という立場を明確にします。つまり神は、すでに裁きを行い、アブサロムとその軍を滅ぼし、現実にはダビデをエルサレムに連れ戻しておられる最中なのです。ですから神が与えた救いの日に、もはやシムイを死刑にする必要はないというのが、ダビデの立場なのです。

【25～31 節】

次に「サウルの孫メフィボシェトも王を迎えに下って来た」というのです。彼は友人ヨナタンの遺児であり、ダビデが特別に保護してきた者でした（Ⅱサム 9:11, 13）。しかしメフボシェトは、ダビデの「都落ち」に際しては従いませんでした。さらにアブサロムの反乱に乗じて、サウル家の再興を考えもしました。

しかし 25 節では、「彼は、王が去った日から無事にエルサレムに帰還する日まで、足も洗わず、ひげもそらず、衣服も洗わなかった」というのです。メフボシェトは、そのようにしてダビデの歩みに連帯していたというわけです。

メフィボシェトは、ダビデに対して事情を説明しています。いわば言い訳です。そこでダビデは 30 節で「もう自分のことを話す必要はない」といい、メフィボシェトに対して「ツィバと地所を分け合うように」と命じています。つまりダビデは忠臣ツィバの保護のもとにメフィボシェトを置いたのです。

【32～40 節】

以上のようなことがあった後、バルジライが見送りに来ていました。彼は、すでにふれたようにマハナイムでダビデたちが生活するのに必要なものを支援した者です。すでに 80 歳になっていました。ダビデは、バルジライに対して心からの感謝として王宮で生活するように勧めました。しかしバルジライは辞退します。それは高齢になり「善悪の区別も知りません。何を食べても飲んでも味がせず、男女の歌い手の声も聞えない」ので、自分は王の重荷になってしまう。今日でいえば介護の労を負わせることになるということです。そうやってはいけないので、自分は自分の町で死にたいというのです。実に感動的な場面です。しかもバルジライは自分の息子であるキムハムをダビデの僕としてお供させることを願い、許可されました。こうしてダビデたちは、ヨルダン川を渡り、ギルガルに向かって進むわけです。

【41～44 節】

さて、ダビデたちがギルガルに向かって進むとき、ユダの兵全体とイスラエルの兵半分が随行していました。そのため両者の間でもめ事が起こるのです。

最初にイスラエルの兵たちは、ダビデ王に対して、あなたは我々の王であるのに、なぜユダの人々があなたを奪い取るのかというのです。これは、ユダの人々が「王と御家族が直属の兵と共にヨルダン川を渡るのを助けた」ということから出てきたことです。イスラエルの兵たちが自分たちの王であるはずのダビデを助けるチャンスがなかった、あるいは奪われた、ということです。

それに対してユダの人々は、「王はわたしたちの近親だからだ」といっています。つまり血縁関係における優位をいったわけです。

さらに言わなくてもいいことをいうのです。王から特別の報奨をもらっているために助けたといたいのか、と告げたわけです。

それに対してイスラエルの人々は、二つのことをいうのです。一つは、イスラエルには十氏族いますから、王の御支配の恵みはユダの人々の十倍であるべきだ、ということ。もう一つはユダ族よりもイスラエルが先にダビデを王として呼び戻したということ。このように言いました。しかしユダ族の人々の言葉の方がイスラエルの人々よりも激しかったというのです。つまり、アブサロムの反乱においてイスラエルの人々はダビデを裏切ったが、ユダの人々はそうではないからでしょう。

【20 章 1～2 節前半】

とにかくこのような確執が、エルサレムに着く以前に起こったのです。そしてこの亀裂につけこんで反乱をしかけたのがシェバという「ならず者」です。彼は角笛を吹き鳴らして次のように言ったのです。

「我々にはダビデと分け合うものはない。
エッサイの子と共にする嗣業はない。
イスラエルよ、自分の天幕に帰れ。」

このようにいってイスラエルの人々を扇動しました。これは反ダビデー反ユダの標語のようなものです。そうすると、イスラエルの人々は皆ダビデを離れてしまい、ビクリの子シェバに従ってしまったのです。かつてイスラエルの人々は協議を重ねてダビデを王とするといっていました。それなのに、ダビデを王とするのを止めてしまうのです。ここから後にシェバの反乱がおきるわけです。

ところで注目すべきは、このような離反に対して、ダビデは何もしていないということです。何故でしょうか。その一番の理由は、エルサレムに帰還することが最優先だったからです。つまりダビデは、主なる神が自分をエルサレムに連れ戻してくださるという救いの御業に従うことを重んじたのです。ということは、離反したイスラエルを連れ戻すことについては、主なる神に委ねたということです。

このように目の前に起こる問題に対して、今、何を最優先にすべきか。これは、しばしば悩ましいことではあります。ダビデは、主なる神の御心に従っていくのですが、これはまた、わたしたちも倣いたいことです。

【3 節】

こうしてダビデはユダの人々と共にエルサレムに帰還し、王宮に戻ることができたのです。そこでダビデは、王宮の留守番役を託した十名の側女たちに感謝し、生涯面倒を見ることにします。しかしダビデ自身はもはや彼女たちの所に入ることはありませんでした。それは彼女たちがアブサロムによって奪われた者たちであるからです。もしも彼女たちの所にはいったなら、どうなるでしょうか。アブサロムと同じく世俗の権力者と同じ振る舞いをするようになります。彼女たちを見世物扱いするのと同じになってしまうのです。

さらにダビデは彼女たちを監視付きの家に閉じ込めたといわれています。それは、シェバの反乱が起こりそうな状況の中で、彼女たちがシェバ率いるイスラエル側に奪われたり、賛同したりしないようにするためののです。

こうしてダビデの目の前には、エルサレムに帰還したものの、再び一つの神の民イスラエルをいかに形成するのかという大きな課題があります。これは、シェバの反乱を制圧した後に実現していくことなのです。